

農林水産大臣賞

垂水市漁業協同組合 (鹿児島県垂水市)

養殖
カンパチ

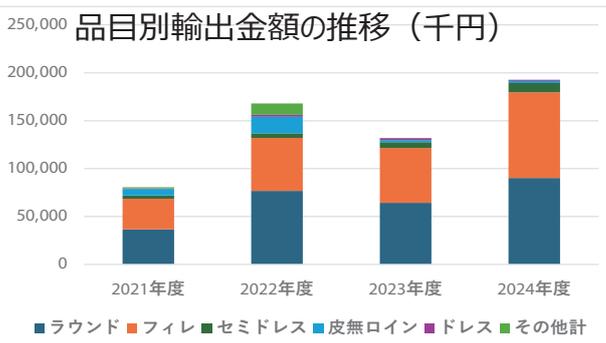
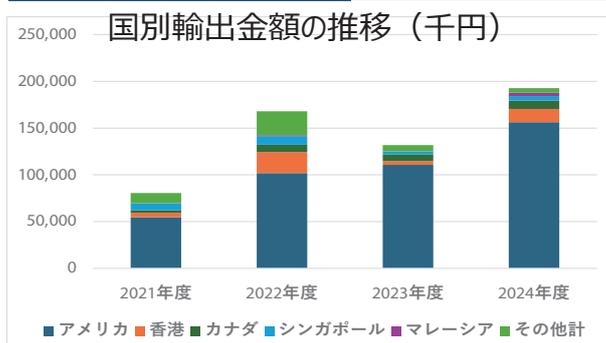
・アメリカ
・香港
・カナダ
・シンガポール
他

世界最大規模で生産される養殖カンパチを海外へ

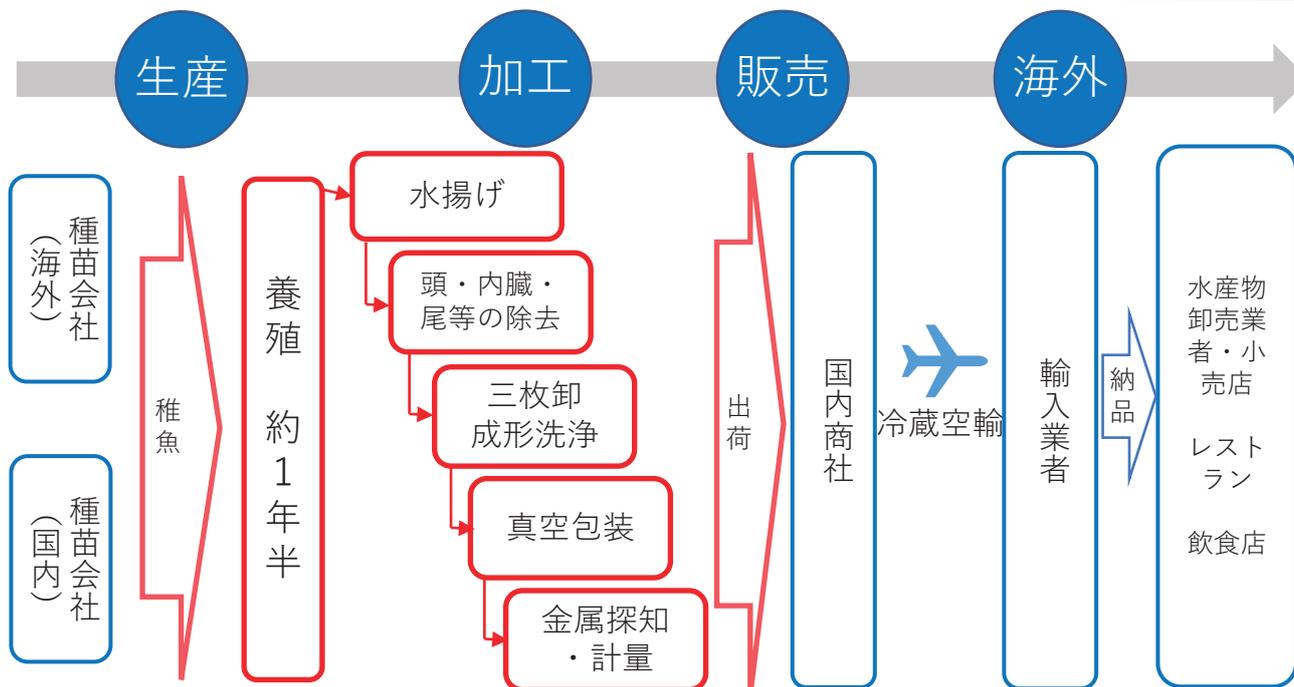
取り組み内容

- 昭和40年代にブリの養殖を始めたが、平成元年の台風で壊滅的な被害にあった。当時ブリより飼育管理が難しく、日本近海では、稚魚が採れないが故に販売単価が高いカンパチへ魚種転換をした。
- 現在は、約110万尾の天然種苗、約25万尾の人工種苗を仕入れる、世界最大級の養殖生産規模。
- 毎年5月頃に海外から稚魚を搬入し、約1年半で出荷するサイクルを採用。増肉係数や成長曲線を考慮し、出荷サイズと時期をコントロールし、周年出荷を実現している。
- 水揚げから加工、包装、梱包、出荷まで、一連の業務に対応しており、生鮮品として海外輸出が可能な生産体制を構築している。

輸出実績の推移



輸出の仕組みチャート



輸出に取り組んだ背景

- 「養殖カンパチ」の新たな市場として、平成21年頃から輸出に取り組んでおり、徹底した品質管理や周年出荷により、独自ブランドである「海の桜勘」が売上を伸ばしている。
- 生産体制が整っており、FSSC22000認証をはじめ、アメリカや中国など各輸出先国計9か国の施設登録を順次取得済み。
- 農水省による「大規模輸出産地モデル形成等支援事業」や「フラッグシップ輸出産地」などの制度を有効活用するとともに、鹿児島県や垂水市からも支援を受けて、官民一体となった輸出拡大への取り組みを実施。

課題と解決のポイント

👉 安全安心な商品

トレーサビリティ体制の確保が困難な海外産天然種苗に依存する現状では、商品の安全性の観点から、特に欧米では今後ますます敬遠されることになる。

現在、人工種苗の仕入に転換を図っている。また資源への負荷が低いとされている完全EP化(養殖魚用の飼料を高温・高圧で人工的に製造)にも取り組み、これらは海外、特にアメリカ市場での高評価につながる。

👉 カンパチの知名度向上

国内外、特に海外でのカンパチの知名度はサーモンやマグロ、ブリ等と比較するとまだまだ低く、海外でのカンパチの知名度向上への取り組みが必要。

これまで以上に、海外でのシーフードショーなどへの積極的な出展を通して知名度向上を図っていく。また県・市の支援も得て、海外からの産地視察を受け入れて、当漁協の高い品質管理などもアピールし、海外販路拡大を図る。

👉 差別化の確立

天然種苗から人工種苗への転換や完全EP(人工飼料)化に加えて、輸送における冷蔵最適化や、トレサビ情報の提供など、独自の差別化を図り、販促につなげる。

日立グループと組んで、温度検知QRコードラベルによる鮮度保持の実証実験を行い、最適な輸送品質を構築し、輸送コストと環境負荷の軽減に取り組んでいる。



▲ 桜島を囲む錦江湾は温暖かつ急深で、養殖に適した環境。漁協では休薬期間を厳守し、残留抗生物質の検査を徹底し、漁場環境調査を毎年クリアしている。



▲ 漁協内で加工処理された「海の桜勘」。ブランド名称は2003年に地元の小中学生から愛称を募集して命名。



▲ アメリカ等での海外での食品見本市などへも積極的に参加し、ベトナム等の新規市場開拓では捌き方講座や試食会を開催している。

今後の展望

- 最も輸出規模の大きいアメリカでは、水産物の資源状態についての格付け機関である「シーフードウォッチ」などの基準により、天然種苗への依存が問題視される傾向にあり、人工種苗・完全EP化への対応が急務であり、これによりさらなる差別化が実現できる。
- アメリカの大手業者は加工技術を有しておりラウンド(一本物)が好まれる反面、小さな事業者は加工の手間が敬遠されるのでフィレ等の加工した商品が好まれるため、今後は各国や個々のエンドユーザーのニーズにきめ細かく対応する。
- 残渣も魚粉として業者に販売しており、廃棄物ゼロの事業であることもアピール強化する。